

# 情報教育

山岸朋子 池田絵里 直寄宏美  
山岸郁生 荒木泰彦 谷本克典  
八崎和美 今井直人

## 1 情報教育のとらえ

これまでの取り組み

\*11997年「情報化の進展に対応した初等・中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議」の「体系的な情報教育の実施」に対する最終報告

調べる・まとめる  
伝え合う

カリキュラムづくり

情報化の進展に対応した初等・中等教育のあり方について検討する協力者会議(\*1)では、情報活用能力を「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の三つに整理して位置づける提案を行っている。本校では情報教育の目標を「情報活用の実践力を培う」と設定し、以下のように取り組んできた。

### <情報活用の実践力を教科横断的な資質・能力としてとらえる>

情報活用の実践力はそれぞれの教科の中の「調べる・まとめる・伝え合う」活動の一連の流れの中で育てていく。つまり、情報活用の実践力は各教科の中に存在し、「調べる・まとめる・伝え合う」活動は各教科の下支えとなりうるもので、この一連の活動を抜きにしては各教科の学習活動は成立しないとさえいえるものである。それを、それぞれの教科でバラバラに育てるのではなく指導者が意識して関連する教科をつなげて育てていくことが大切である。このような発想でカリキュラムづくりをしていくことが情報活用の実践力を育てることになり、さらに教科のねらいを達成することにもなると考えた。

また、情報活用の実践力は「調べる・まとめる・伝え合う」の一連の活動の中で育てられるが、育てられる能力と活動は有機的・複線的にかかわっており、どの活動でどの能力が育まれるとはっきり規定されるものではない。とはいえ、重点的にその活動で育てたい能力は存在すると考え、以下のように想定した。

- ・調べる活動→情報を収集し、読み取る力
- ・まとめる活動→情報を新たに構造化する力
- ・伝え合う活動→情報を表現し、交流する力

これらの活動に焦点をあてて単元構成をし、授業実践していくことで各教科や総合の中で情報活用の実践力を育てていくことに取り組んできた。

今年度は、今までの取り組みを継続しつつ、情報教育における「学びを深める思い」をどのようにして育めばよいのかを明らかにしていく。

## 2 情報教育における「学びを深めようとする思い」とは

学びを深めようとする思い

教科・総合を通して伝え合おうとする思い

情報活用の実践力は、他者とのコミュニケーションを意識した活動の中で育まれ、また他者への伝達手段という必要感に支えられた活動の中で有効に機能する。そこで見方・考え方を共有し、新しい視点を得たり、考えを深めたりすることができるのである。しかし、それが可能になるためには、「調べる・まとめる」活動の段階から相手意識、目的意識をしっかりと持つことが大切である。自分の考えをまとめるための情報の収集の仕方も、相手意識、目的意識をしっかりと持つことでひとりよがりの調査活動に陥らない。

また、情報活用の実践力とは教科を横断する資質・能力であり、各教科の学びを深めるためのものとしてとらえることができる。言い換えれば情報教育の視点から教科の授業を見直すことによって教科の学びを深めることができるということである。それを子どもの立場に立っていうと「学びを深めようとする思い」ということになる。具体的には以下のように考える。

- 相手に思いや考えを伝えようとする思い
  - ・相手に正確に伝えようとする思い
  - ・思いを整理したりまとめたりして伝えようとする思い
- 相手の思いや考えを受け取ろうとする思い
  - ・相手の思いや考えを読み取ろうとする思い

自分なりに構造化した情報を相手の立場を考えて伝え合うことで、新たな見方、考得方を獲得し、自分の学びをさらに見つめ直し、深めていくことができると考える。

### 3 学びを深めようとする思いを育むために

#### (1) コミュニケーションを活性化させる

コミュニケーション能力  
情報のよき伝え手  
受けとり手

「伝え合う場」で学びを深めるためには、コミュニケーション能力を高めることが重要になる。そのためには、まず一人一人が情報のよき伝え手、受けとり手でなければならない。情報を正確に理解し、適切に表現する力を育てることが基本になる。その基礎・基本を国語科の学習でしっかりつけていく。そして、関連する教科を有機的に結びつけたカリキュラムの構成をすることで、その力が他の教科にも応用できるように試みる。また、授業以外でも、お互いに自由に言い合える学級の雰囲気づくりや、朝の1分間スピーチで話し方を鍛える、相互評価で聞く力を鍛える等で日常的に「聞く・話す」機会を多く持つことを心がけていきたい。

IT デジタルコンテンツの  
活用  
\*2 デジタルコンテンツ  
デジタル化された教材  
インターネット上の WEB で  
公開されているものが多い

コミュニケーションの媒体として IT・デジタルコンテンツ (\*2) の活用を授業に位置づけていくことも効果があると考えられる。IT の活用の場合、それぞれの IT がどのような特性を持ち、どういう場合に適しているのか、どういう学びに適しているのかを見極めながら位置づけていく事が大切である。デジタルコンテンツを利用して教科の授業を行うことは、そのねらいに迫るために有効な場合も多いが、この場合も教科の「学びを深めようとする思い」の表出に効果的であるかどうかを吟味する必要がある。また、自分の思いを表現するための手段としてデジタルコンテンツを作り、伝え合う場で使うことで、よりお互いのコミュニケーションが活性化されることを期待する。IT やデジタルコンテ

情報の科学的理解

ンツの特性の理解、適切に扱う経験は「情報の科学的理解」においても重要なことである。

外部との交流

「伝え合う場」を広げて、学校内を超えて外部と交流することもコミュニケーションを活性化させることにつながる。例えば、地域の人との交流、取材先のお店の人や農家の人との交流などが考えられる。さらに、インターネットを使って外の学校との交流、国外との交流を設定することで、情報交換の枠が広がりたくさんの人と交流することができる。そこで多様な価値観にふれることができ、自分の学びを見つめ直し、さらに学びを深めようとする思いを持つことができることを期待する。

情報社会に  
参画する態度

そのような活動には必ず相手が存在する。情報モラルの必要性や、プライバシーを守ることの責任などを考え、望ましい情報社会の創造に参画しようと態度を養うことにも十分留意していきたい。

## (2) 見取りと評価のフィードバック

継続的な評価

自己評価ではそれぞれの教科や総合学習の観点でのふりかえりに情動的要素の観点を加味しておく。その観点は「伝え合う活動」に重点を置いたものとする。自分なりに構造化した情報を相手の立場を考えて伝え、受けとる活動の中で関わり合おうとする、よいところを見つけようとする、比較しようとする等の姿を、指導者が個人や学級集団に継続的に価値づけていくことで、そのよさが共有化され、個に内面化されていくと考える。そして、自分が変容していく楽しさを自覚する。それがさらなる情報発信に生かそうとする意欲につながり、ほかの友だちの考えもどんどん取り入れていこうとする姿が期待される。

Rublic  
評価基準

評価方法の一つとして、今年度は Rublic 評価も取り入れていく。この評価を取り入れることで、子どもは学習のねらいをしっかりとつかみ、ゴールを意識し取り組むことができる。また、自分の学習の達成度を確認しながら進めることができるので、自分を俯瞰してみるメタ認知能力の育成をも期待するものである。

## 4 実践例 -3・4年複式-

(1) 単元名 4コマの写真で伝えよう (基礎・収集・処理・表現)

(2) 目標

- ・伝えたいことがらを明確にし、聞き手に伝えるために、デジタルカメラの画像を選んだり、ナレーションを工夫したりできる。
- ・友達の表現の工夫やよさに気づき、感想を伝え合うことができる。

〔複式学級合科プランの段階別目標〕

基礎：デジタルカメラの基本的な操作法・画像処理法を習得する。  
収集：デジタルカメラで様々な画像を撮る。伝えたいことがらを考える。  
処理：伝えたいことがらにふさわしい画像を選ぶ、文章を作る。  
表現：4コマ写真とお話で、自分の思いを伝える。他者の思いを受けとる。

(3) 指導にあたって

### ① 教材のとらえ

本単元は、伝えたい事象・目的を明確にし、伝えたい相手へ画像と簡潔な文章でプレゼンをする技能を培うための学習である。複式学級の児童は、低学年で公立学校に在籍し、様々な表現方法を学習してきた。各教科の学習の中で、各々の既習方法で表現し合う姿は、お互いを刺激しあう効果はあるものの、本校の情報教育で目指している「伝え合う」活動が充分経験されていないことも事実である。よって、「伝えたいことを分かりやすく相手に伝える」という、本校では低学年の間に身につけておくことを補填する意味から、本単元を学習することとし、一方でデジタルカメラの操作技能習得をねらいとした。

学習を進めるにあたっては、「伝える相手を意識すること」と「伝える内容・方法を工夫すること」を重視する。実践1「学校を紹介しよう」では家族を、実践2「私の住んでいる地域を紹介しよう」では学級の友達を、伝える対象に限定した。対象を明確にすることで、相手に応じた画像の選択や言葉遣いを意識させる。また、4コマ写真と簡潔な文章に限定することで最も伝えたいことを焦点化することを目指した。

本単元は総合学習として扱うが、国語科単元「新聞記者になろう」での新聞作り、「伝言はまちがえずに」での話し方、社会科単元「住みよいくらしをささえる」での発表活動等に直接つながるとともに、日常生活での「伝え合う」活動の基礎能力を培うことになると考えた。以上のことから、総合学習としての本題材は、画像撮影・画像選択・ナレーション作成・他者の作品を受け取るといった認知的側面で、国語科・社会科・理科・図工科とかかわりを持つ。

デジタルカメラの操作技能習得においては、ピント・フォーカス・露出の意識をするとともにたくさんの画像アルバムから、伝えたいことに即して順序よく画像を選び出すという、選択力を培いたい。さらに、肖像権に触れて、情報のモラルやマナーについて意識させる機会をもつ。

評価活動におけるRubricの活用については、デジタルカメラ操作に関する場・画像選択や文章作成の場・発表用作品仕上げの場・発表会の場（発表者として）・発表会の場（受け手として）という5つの場において行う。児童に項目作成の能力はまだ身に付いていないので、指導者の側で評価項目を提示する。

### ② 本単元における「学びを深めようとする思い」

○伝える相手を意識して、画像だけでなく文章を使つて的確に伝えようとする思い

- ・映像化能力として…伝えたいことを、視覚的な情報として整理し表現しようとする。
- ・言語化能力として…伝えたいことを、言語として整理し表現しようとする。
- ・自分の考えや思いが明確になるように、組み立てや順番を工夫しようとする。

○友達の作品の発表を通して、「情報を読みとる力」を身につけ、次の学習へと生かそうとする思い

- ・他者の作品から刺激を受け、自らの作品を修正したり、次の学習で生かすためのヒントを見つけたりする。

### ③ 「学びを深めようとする思い」を育むために

#### ★重点1（「学びを深めようとする思い」が表出する場の構想）

単にデジタルカメラの操作技能を習得するためでなく、個々の思いに応じた的確な画像を撮ることが必要になる。個々の思いがより深まるために、伝える相手・対象とことがらを明確にした二つの活動を設定した。一つ目は、「家族を対象にした学校紹介」であり、二つ目は「友達を対象にした在住地域紹介」である。前者は練習編・後者は応用編と位置づけ、最後に発表会の場を設けることとした。

画像撮影は何枚も行うが、発表時は4枚の画像に制限する。さらに補足として加えるナレーション（文章）も最小限にし、簡潔にはっきりと伝えることの必要性を学ばせたい。その学習を通して、発信者の一方通行にはならない「伝え合うこと」の意義を知らせる。

一方で、受け手側としての「読みとる力」を身につけさせるために、発表会を設定し、思いを表出する場と位置づけた。

#### ★重点2（「学びを深めようとする思い」のよさをとらえフィードバックする）

個々の活動場面が多い本題材においては、「学びを深めようとする思い」のよさは、瞬時に起こり指導者が捉えにくく、フィードバックすることが難しいことが想定される。そこで複式学級合科プランにあるRubricを効果的に活用したいと考えている。つまり、Rubric項目を認知的側面のよさが意識できるように意図的に作成し、個々人が自己評価する中で、よさを意識し見つけていく。さらに活動の中で子ども同士が相互によさをフィードバックしたり、指導者が全体の場でフィードバックしたりを繰り返したい。その場での共有化は難しいが経験の積み重ねが、よさを認め合うことにつながるだろう。

実践2では、個々人→4人グループ→学級全体・・・という段階で「学びを深めようとする思い」を表出する場を設定する。特に、4人グループの活動において、相互評価が深まり、よさのとらえやフィードバックが、グループ内で起こることを期待したい。

#### ★重点3（子どもの見取りの在り方と生かし方）

本単元では、課外の活動が多く（取材活動・撮影活動）、作業も個人が中心となる。よって個々の作業・活動に差異が出ることは明らかであり、指導者が状況を掌握することが必要となる。そこで、児童活動カードを作成し、進行状況や思いの変化を適切に把握するような手だてをとりながら、児童を見取っていききたい。さらに、Rubric項目を工夫し、児童個々人が自分の活動や作業を検証できるようにしたい。

#### ★本単元における「サイクルモデル」の機能した姿

個々の段階では、作成中・発表の際にサイクルを経験する。作成中には指導者からの評価・友達からの刺激からよさを見いだされ、フィードバックされることで内面化につながる。その中で共有化する場が弱いので、指導者が意図的に授業の初めに「よさ」を共有する場を設けたい。ただし、共通の目標を持って学習するものではないので、個々のサイクル経験が、学級全体に浸透することは期待ができない。一人一人がサイクルをくり返し経験することの積み重ねで、以後の学習へとつなげていきたい。

#### ★「学びを深めようとする思い」が育まれた状態＝「思いが表出された姿」

本単元における「学びを深めようとする思い」が育まれた状態は、以下のように児童が変容した状態にある時をさす。

- ・デジタルカメラの撮影技能を習得し、画像を撮ることができた姿。
- ・伝える相手やねらいを意識し、自分の思いに応じた画像を選び出すことができた姿。
- ・自分の思いに応じたナレーションを考え、話し方を工夫することができた姿。
- ・友達の作品のよさや工夫したことを認めることができた姿。
- ・友達の作品のよさや工夫したことを自分の作品生かそうとした姿。
- ・次の活動へと意欲を高めた姿。

(4) 単元計画 (総合+課外 ・ 総時数 12 時間)

他教科との関連	総合学習の活動と内容	段階	評価 Rubricの場
社会科 「きょうどを開く」 ・見学時の撮影 ・長坂用紙新聞作り	<b>デジタルカメラの技能習得</b> 《デジカメ名人になろう》 ○学校の周りを撮る 友達の顔を撮る ・電源 切・入 ・撮影姿勢 ・撮影 削除 印刷 保存 ・ピント、フォーカス、露出の工夫 	基礎	デジタルカメラの基本的な操作ができる Rubric 1
理科 「季節と生き物の様子」 ・植物生育の撮影 一年間継続撮影 	《すてきな写真を紹介しよう》 ○写真撮影をする (課外) ○写真を取り組むソフトの操作習得をする ・Phonickによる取り込み 選択 スライドショー ○写真を選んで発表会を開く ・簡単なスライドショー ・撮り方や被写体についての交流会	収集	伝えたいことがらに応じた画像を撮ることができる
図工科 「顔・かお・カオ・・・」 ・目的に応じた画像の撮影	<b>家族を対象にした学校紹介 (実践1)</b> 《学校じまんをさがそう・伝えよう》 ○学校の自慢や特徴を撮影し調査する 伝える相手→家族 伝える目的→学校のよさ ・学校内の観察と撮影 調査 ・画像の選択 組み合わせ 文章作成 ○家族にプレゼンをし評価を受ける ・友達との間でリハーサル 修正 ・家族へのプレゼン 評価カード回収 ・評価カードの報告会	基礎	家族に伝えたい目的やことがらを計画することができる Rubric 2
国語科 「伝言はまちがえずに」 ・要点をまとめる ・話を聞き取る	《学校じまんをさがそう・伝えよう》 ○家族にプレゼンをし評価を受ける ・友達との間でリハーサル 修正 ・家族へのプレゼン 評価カード回収 ・評価カードの報告会	収集	友達の発表にアドバイスができる
国語科 「伝言はまちがえずに」 ・要点をまとめる ・話を聞き取る	<b>ネチケット・情報モラル</b> 《撮っているもの 悪いものを区別しよう》 ○肖像権や著作権のしくみと必要性を知る ・使用可能な画像の区別 ・インターネット等による画像使用 	処理	目的に応じたプレゼンで家族に伝えることができる Rubric 3
国語科 「分類ということ」 ・目的に応じた分類 ・紹介文の作成	<b>友達を対象にした地域紹介 (実践2)</b> 《私の住んでいる地域を紹介しよう》 ○在住地域や周辺の紹介をするための素材集め 相手→友達 目的→地域の特徴 ・在住地域の調査 撮影 (課外) ・画像の選択 紹介文作成 ○プレゼンを作成しグループで見合う ・グループ内でのミニ交流会 ・画像 文章の検討 相互評価 ・画像差替え 文書変更 プレゼン修正	表現	肖像権や著作権を理解し 情報モラルを意識できる Rubric 4
理科 「月や星の動き」 ・プレゼン用ソフトの活用	《私の住んでいる地域を紹介しよう》 ○在住地域や周辺の紹介をするための素材集め 相手→友達 目的→地域の特徴 ・在住地域の調査 撮影 (課外) ・画像の選択 紹介文作成 ○プレゼンを作成しグループで見合う ・グループ内でのミニ交流会 ・画像 文章の検討 相互評価 ・画像差替え 文書変更 プレゼン修正	基礎	伝える相手を考えて適切な紹介計画を作ることができる Rubric 5
社会科 「住みよいくらしを・・・」 ・調査の発表 ・相互評価	《交流会を開いてみんなの地域を知ろう》 ○交流会を開き 個々の思いを伝え合う ・グループ内でのリハーサル 修正 ・発表者のめあて 聞き手のめあて ・学級内でのプレゼン 評価カード	収集	限られた枚数 時間の中での確に思いを伝えるように工夫できる Rubric 6
社会科 「住みよいくらしを・・・」 ・調査の発表 ・相互評価	《交流会を開いてみんなの地域を知ろう》 ○交流会を開き 個々の思いを伝え合う ・グループ内でのリハーサル 修正 ・発表者のめあて 聞き手のめあて ・学級内でのプレゼン 評価カード	処理	友達の発表を認めあえる Rubric 7
社会科 「住みよいくらしを・・・」 ・調査の発表 ・相互評価	《交流会を開いてみんなの地域を知ろう》 ○交流会を開き 個々の思いを伝え合う ・グループ内でのリハーサル 修正 ・発表者のめあて 聞き手のめあて ・学級内でのプレゼン 評価カード ★題材の学習をまとめ ふりかえりをする★ 	表現	友達の作品のよさや工夫したことに気づき思いを受けとる Rubric 7

(5) 本単元における授業の実際と考察

本項では、以下の①～⑥に分けて、本単元の学習過程・指導者の支援や手だてを検証する。

- ①【複式学級合科プラン】に関する考察・・本単元の位置づけ、他教科との関連
- ②「デジタルカメラの技能習得」に関する考察・・学習の場1（基礎・収集）
- ③「家族を対象にした学校紹介（実践1）」に関する考察  
・・学習の場2（収集・処理・表現）
- ④「ネチケット・情報モラル」に関する考察・・学習の場3（基礎）
- ⑤「友達を対象にした地域紹介（実践2）」に関する考察  
・・学習の場4（収集・処理・表現）

⑥「Rubricを活用した評価活動」に関する考察

本単元設定のもとになった【複式学級合科プラン】による、総合学習の位置づけを説明し、以後本単元の活動ごと（設定した場ごと）で「学びを深めようとした思い」を育んだかを示し、指導者としての解釈と課題を明らかにする。また、本単元の評価活動に用いたRubricについてその実態・有用性・課題を考察する。

①【複式学級合科プラン】に関する考察

表1：「学級合科プラン」

### メディアリテラシーに関わる 複式学級合科プラン

・基礎→情報に対する基本的な姿勢・情報を活用するマナー・コンピュータや周辺機器の基本的操作

**メディア活用の技能習得と活用を目指した総合的学習**

- ・収集→情報の聞き取り・インターネットの使い方・絵、図、表、写真の見方や扱い方
- ・処理→必要なアプリケーション操作の習得・情報の選別と区別・情報の整理・作成データの保存
- ・表現→表現への目標設定・独創的な表現方法の開発・トピックの作成活用・交流会の実施
- ・発信→プレゼンテーション力の育成・発表会の実施・他者との相互評価

ねらい：情報を適切に収集・処理・表現・発信するために、情報手段・メディアを活用し、Rubricを取り入れながら、情報教育の基礎的な知識と技能を習得する。

評価の対象となる活動に対して、4個の評価項目（基準）を設定し、児童自身が自己評価し、次の学習に生かすもの。

**技能習得**

コンピュータの基本的操作    ローマ字入力    デジタルカメラ    画像処理ソフト（ネチケット・マナー）    インターネットワープロソフト    スキャナー    デジタルビデオ    プレゼンソフト

総合題材	コンピュータは友達	4コマ写真で伝えよう	複式学級のおすすめ	金沢から全国の複式学級へ	10年後の私へ 成人式ビデオレター
国語科	「新聞記者になろう」 基礎 収集 表現	「ローマ字」 基礎	「伝言はまちがえずに」 収集 処理	「分類ということ」 基礎 収集 表現	「四年三組から発信します」 収集 処理 表現 発信
社会科	「きょうどを開く」 基礎 収集 表現	「住みよいくらしをささえる」 収集 処理 表現	「安全なくらしを守る」 基礎 収集 処理 表現 発信	「むかしの人びとのくらし」 収集 処理 表現 発信	
理科	「季節と生き物の様子」 基礎 収集	「月や星の動き」 基礎 収集 処理	「昆虫を調べよう」 収集 処理 表現	「冬の星」 収集 処理	「草花や動物の一年間」 基礎 収集 処理 表現 発信
音楽科	「体で音楽」 基礎 収集	「ふるさとの音楽」 収集 処理 表現		「楽しい音楽会」 収集 処理 表現	
図工	「顔・かお・カオがいっぱい」 基礎 収集 処理		「附小美術館」 収集 表現		「わたしからあなたへ」 処理 表現 発信

上記に示した表は、本年度の複式学級総合学習の基本計画となる、【複式学級合科プラン】である。情報教育理論をもとに、複式学級では「情報活用の実践力」を中心にした、メディアリテラシーの習得を年間通じての大きな課題と位置づけている。複式学級の特性上、児童は、他の公立私立小学校にて1・2年生の学習を済ませており、情報教育の学習状況は様々である。そこで、本校の1・2年生の情報カリキュラムも含めて、複式学級独自の総合学習カリキュラムを作成した。しかし、情報リテラシーにかかわる時数は「年間10時間まで・総合に特設」という規定があるので、他教科（国語科・社会科・理科・音楽科・図工科）との合科カリキュラムとした。

このカリキュラムでは、単に技能習得だけでなく、情報教育の様々な学習場面を設定することを目的とするので、総合単元・および各教科の単元に、5つの学習段階を設けた。「基礎」「収集」「表現」「処理」「発信」という5段

**合科プランのねらい**

情報を適切に収集・処理・表現・発信するために、情報手段・メディアを活用し、Rubricを取り入れながら、情報教育の基礎的な知識と技能を習得する。

階であり、各々の単元に学習目標として位置づけるようにした。

さらに、評価方法として部分的に「Rubric」を導入し、自己評価の上次の学習に生かすよう工夫した。

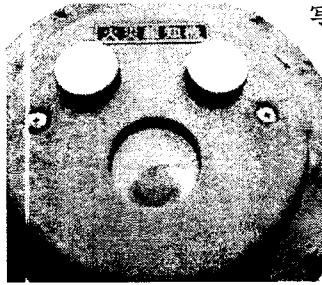


写真1 「顔・かお・カオがいっぱい」

図工科。デジタルカメラで、校内の「顔に見えるもの・場所」を撮影する学習。

写真2 「長坂用水」

社会科。デジタルカメラで撮影した画像を使って「長坂用水新聞作り」。インターネットで長坂用水の検索。



写真3 「コンピュータは友達」

総合。3年生と4年生がペアになり、基本操作やソフト・ゲームの使い方を、4年生が指導する学習。



写真4 「新聞記者になろう」

国語科。北國新聞記者の大川雅子さんをゲストティーチャーに迎えて、『記者さんへの質問』での学習。

### 5つの「学習段階」の主な内容

- ・基礎→情報に対する基本的な姿勢・情報を活用するマナー・コンピュータや周辺機器の基本的操作
- ・収集→情報の聞き取り・インターネットの使い方・絵、図、表、写真の見方や扱い方
- ・処理→必要なアプリケーション操作の習得・情報の選別と区別・情報の整理・作成データの保存
- ・表現→表現への目標設定・独創的な表現方法の開発・トピックの作成活用・交流会の実施
- ・発信→プレゼンテーション力の育成・発表会の実施・他者との相互評価

5つの「学習段階」については、情報教育理論《1 情報教育のとらえ》にある、「調べる活動」「まとめる活動」「伝え合う活動」に対応するものであり、複式学級の特徴に基づき、基礎・収集・処理・表現・発信とした。情報教育全体として本年度は、「伝え合う活動」を中心にして取り組むことにしている。「学習段階」でいえば、「伝え合う活動」を中心とすることになるが、学級の実態（3年生は本年度より他の公立私立小学校より編入してきた）から考えて、「調べる活動」「まとめる活動」を充実させる必要があると思われる。よって、1学期は「調べる活動」・2学期は「まとめる活動」・3学期は「伝え合う活動」を中心としたカリキュラムとした。

「情報活用の実践力とは教科を横断する資質・能力である」と、情報教育理論で述べたが、上記の合科プランを採用することで、教科間（総合も含む）の関係や学習の役割が明確になった。さらに、ほぼ時系列で、コンピュータ・周辺機器の操作やソフトの活用など技能習得を行うこともでき、技能習得における特設の10時間以外にも、各教科の時数内で技能習得の時間を確保することができた。一方で、複式学級の特徴を踏まえて、以下の3点について再考の余地があった。

#### ア 各教科のカリキュラムに負担がかかること

本校で作成した、各教科各単元・題材のカリキュラムには元来「情報教育」の項目が入っていないものが多く、新たに複式学級用のカリキュラムを編成し直す必要があった。

#### イ 各単元・題材のねらいがかわること

カリキュラムを再編成する際に、各単元・題材のねらいに情報教育にかかわるもの（「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の何れか1つ以上）を加えることになり、教科の特性に無理をかけるものもあった。

#### ウ 時間的にRubricの活用が可能なのは総合だけであったこと

評価方法の一方策としてRubric（後述）を導入したが、時間的に制限があり、実際に導入できたのは総合だけであった。

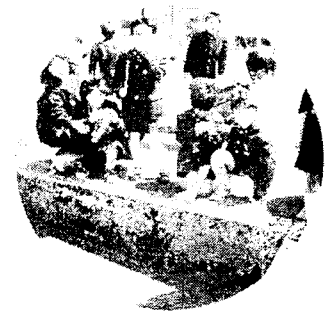


写真5 「社会科見学」

「長坂用水」の見学でデジタルカメラを操作・撮影する様子。



## ②「デジタルカメラの技能習得」に関する考察

### ～学習過程～

めざす児童の姿〔Rubric 1 A評価〕

・目的にあった写真を何枚もきれいに撮ることができた。

- ◆基礎→デジタルカメラの基本操作・スライドショー
- ◆収集→撮影・画像の見方や選び方

1. 基本的操作の習得
  - ・充電の仕方 ・電池の入れ方 ・電源 on off
  - ・撮影姿勢 プレない方法 ・基本的撮影
2. 応用的操作
  - ・ピント フォーカス 露出の知識
  - ・データの削除 印刷 保存
3. 写真撮影 (課外)
  - ・好きな写真を交代で撮る ・データの保存
4. スライドショー
  - ・スライドショー用ソフト (Photonick) 取り込み
  - ・ソフトの操作と発表会

### 他教科での関連学習

社会科「きょうどを開く」：社会見学での撮影  
理科「季節と生き物の様子」：季節の動植物を撮影  
図工科「顔・かお・カオがいっぱい」：デジカメ撮影

事前調査の結果、デジタルカメラが家庭にある子どもは24人中18人であるが、操作した経験のある子どもは7人であった。つまり、デジタルカメラの存在は知っているものの、操作経験がない子どもが多く、その活用についての知識もほとんどない状況であった。

本校の情報教育でめざす「情報活用の実践力」育成の中では、「調べる活動」において、デジタルカメラの活用は特に重視している。そこで、本単元の導入段階として、デジタルカメラの技能習得にかかわる学習を取り入れた。

操作マニュアルについては比較的抵抗なく学習できたが、被写体さがしや撮影の向き、フォーカスの扱いには戸惑いが見られた。撮影回数を増やし、様々な被写体を撮ることの慣れが、戸惑いを消していったようだ。

表2：デジタルカメラ技能習得の状況

表2でわかるように、デジタルカメラの使用経験がある児童は、1時間の撮影枚数が多く、M児・Q児は10枚を越えた。この両児については、撮影したものを1枚1枚再生し、写りの悪いものについては削除している姿が見られた。デジタルカメラの特長である、「その場での再生と削除」を活用している。他児の場合は1枚を大切にせず、撮影時間がかかるが、両児は多くの枚数を撮影し、不必要なものや失敗したものを削除する、という撮影方法をとったものである。この方法を全体で紹介し、周知したことで、個々の撮影方法が大幅に改善され、以後の活動は「撮って削除する」という方法が多く見られた。

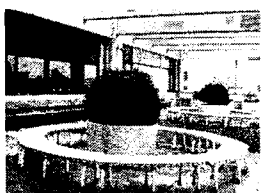


写真6 V児撮影  
屋外図書コーナー  
～画像としては合格～

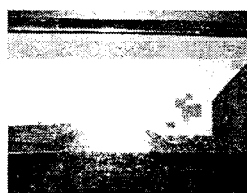


写真7 C児撮影  
ガラス越しに体育館  
～ストロボが反射して×～

撮影した画像は、コンピューター室に指定した個々のパソコンのHDに保存し、フォルダ作成の練習をした。

個々の画像は「Quick Time」(右下参照)にて再生していたが、スライドショーを行う目的があるので「Photonick」(右下参照)を使うことにした。本ソフトの学習には2時間を要したが、操作習得することが本校情報教育の「まとめる活動」において必須であると判断し、総合の時間だけでなく、社会科(「長坂用水」社会見学の撮影)の時間も充てることとした。

児童	撮影枚数	撮影テーマ	事後感想・反省	
A児	3男	3	友達顔	何まいもいっぱいした
B児	3男	2	教室	指がうつった
C児	3男	4	ベランダ体育館	楽しかった
D児	3男	3	友達顔	ピントがずれた
E児	3男	2	ノート	字がうまくとれなかった
F児	3男	60	2年生の農園	色がはっきりでなかった
G児	3女	5	友達顔	顔が小さくうつった
H児	3女	80	特別教室	暗くうつったのフラッシュがいる
I児	3女	4	先生の顔	楽しくできた
J児	3女	3	友達顔	もっとたくさんとりたい
K児	3女	3	音楽室	ピントがおかしい
L児	3女	5	教室ロッカー	小さくうつった
M児	4男	110	通学路	いろんな写真がたくさんとれた
N児	4男	7	植物	ピントがあわない
O児	4男	5	友達顔	正面からとれなかった
P児	4男	4	職員室	暗い写真になった
Q児	4男	100	特別教室	たくさんとれた
R児	4男	3	児童玄関	暗かった ストロボほしい
S児	4男	4	農園	雨の中で大変だった
T児	4男	80	運動場など	きれいな写真が多い
U児	4女	7	階段の絵	印刷したい 写真をほしい
V児	4女	90	特別教室	家のデジカメと使い方が違う
W児	4女	60	玄関・運動場	うまくとれた
X児	4女	7	校舎の特長	暗い写真ばかりになった

○印は、デジカメ経験者

- ◆Quick Time=Mac上で映像と音声を扱うための標準規格。
- ◆Photonick=フォトレタッチングソフト。田中康之氏作。

### ③「家族を対象にした学校紹介（実践1）」に関する考察

～学習過程～ めざす児童の姿〔Rubric 3 A評価〕  
 ・自分の目的に合った発表をし 家族にしっかり伝えることができる

- ◆収集→デジタルカメラの基本操作・スライドショー
- ◆処理→撮影・画像の見方や選び方
- ◆表現→プレゼンテーションの作成・交流会

1. プレゼン計画の作成
  - ・伝える相手、目的、内容
2. 取材活動
  - ・デジカメの撮影
  - ・画像選択
  - ・文書作成
3. 練習・リハーサル
  - ・4枚の写真と10秒トークのリハーサル
  - ・友達同士やグループ内での練習発表 相互評価
4. 家族への発表・評価（課外）
  - ・写真画像とワークシートによる発表
  - ・評価カードに記入し 教室で交流

他教科での関連学習

国語科「伝言はまちがえずに」：要点をまとめる

表3：実践1のワークシート

学校の【                      】を家族に伝えよう	
◆とつた写真の枚数	枚
様式： <input style="width: 100px;" type="text"/>	
どんなことを伝えますか？（計画）	
写真①	<input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>
写真②	<input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>
写真③	<input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>
写真④	<input style="width: 100%; height: 20px;" type="text"/>
★家族からのコメント★	

前時や他教科の活動を通して、デジタルカメラを使った撮影技能が身につくにつれ、パソコンへの取り込みやスライドショーを使った編集ができるようになった。次の段階はテーマを決めた画像を並べて、目的に応じたプレゼンテーションを行うことである。

初歩段階であり、パソコン操作もままならない児童の実態があるため、「対象を家族・4枚の写真・1枚につき10秒のコメント付き」の条件を統一し、学校の紹介を行う計画を各自で立てた。計画作成は、左の表3をワークシートとし、初めにテーマを決めてから取材・撮影を行っても、何枚かの写真を撮った後にテーマを付けてもよいこととし、個人活動に入った。

前活動に比べ、伝える対象ができたことで、本校情報教育の中心課題である「伝え合おうとする思い」を育むことができると仮定した。ただ、子どもの成長段階では、「調べてまとめたものを披露する」程度であり、「伝え合う」には至るような活動ではない。そこで、保護者に事前に依頼して詳細な評価カード（表3ワークシートの下部）を書いてもらうことにした。次頁に抜粋を載せているが、写真のこと・話す内容話し方など、様々な視点からの評価は、子どもへのいい励ましとアドバイスになり、フィードバックに役立った。

さらに、家庭での発表を前にして、子ども同士でプレゼン発表の交流を行い、互いのよさを認めあったり、よさを取り入れたりする機会を設けた。これは、単なるリハーサルに留まらず、よさを認め合う中での、コミュニケーションを活性化させる一つの手段となった。以後、発表の前に、子ども同士で事前リハーサルを行うことをパターン化することとした。

各家庭でプレゼンを行うためコンピュータは使えないが、選んだ4枚の写真とワークシートをもって、初めてのプレゼンに挑戦し、評価をもらって再度集合した。

写真8 D児4枚の写真

テーマ：自まんでできること



写真9 W児4枚の写真  
 テーマ：階段の絵

表4：実践1における学習状況

児童	撮影枚数	発表テーマ	注意点
A児 3男	10	展示品	写真
B児 3男	7	特別なこと	話し方
C児 3男	9	附属ならではの	話し方
D児 3男	4	自まんでできること	写真
E児 3男	5	図書室の近く	文章内容
F児 3男	40	よく使うもの	話し方
G児 3女	5	おもしろい所	写真
H児 3女	140	卒業制作	話し方
I児 3女	12	スバラシイところ	文章内容
J児 3女	5	複式教室の近く	話し方
K児 3女	欠席	**	話し方
L児 3女	7	すごいところ	文章内容
M児 4男	100	気づかないこと	写真
N児 4男	11	附属ならではの部屋	文章内容
O児 4男	8	へーと思うこと	文章内容
P児 4男	9	特別教室	話し方
Q児 4男	150	いつも必ずいく所	写真
R児 4男	6	すばらしいもの	文章内容
S児 4男	4	部屋	写真
T児 4男	130	ヒミツのところ	写真
U児 4女	11	へーっということ	文章内容
V児 4女	120	絵画	写真
W児 4女	90	階段の絵	写真
X児 4女	12	よく行くところ	文章内容

○印は、デジカメ経験者

実践1では、デジタルカメラの使い方にも慣れ、表4からわかるように、デジカメ経験者が特別多く撮っているとはいえない。枚数の視点からいえば、もう未経験の子どもとの差はほとんどなくなった。

右に示したのは、評価カードに書かれた保護者からのコメントである。一部抜粋したものだが、全ての保護者から多くの激励と指摘を受けることができた。本活動では、図らずも、保護者によるコメントが、子どものよさを認め評価するものであったことで、よさをフィードバックするために大きな役割を果たした。コメントは、子ども個人に対するもので留まらず、学級全体へのアドバイスになることも多く、価値あるものだった。

本活動では、情報教育の「学びを深めようとする思い」の一点目にあたる「相手に思いや考えを伝えようとする思い」は実現される場が多かったが、「二点目の「相手の思いや考えを受け取ろうとする思い」に至ることは少なかった。次活動への課題である。

本活動を行うにあたり、プレゼンを成功させる三つの観点を示した。「写真」「話す内容」「話し方」の三点である。活動計画を立てる際に、特に注意する点を確認したところ、表4にて示したように、学年によって差ができた。3年生は「話し方」を選ぶ子どもが半分であったのに対し、4年生は「写真」「話す内容」が大部分である。これは普段の教科授業の様子からも察することで、4年生は「話すこと」には自信をもっており、プレゼンの質的向上をより追求しようとしている。一方で3年生は、写真や話の内容より、人前で話すことを重視している。同じ学級でありながら、学年の違いが顕著に現れており、一斉授業の中での指導は難しいものがあつた。

テーマ設定については、事前にテーマを考へてからデジカメを使う子が圧倒的に多かつた。これは、すでに「家族に学校の〇〇を紹介したい」という強い思いが存在したからであり、素材としては適切であつたと思う。

撮影した枚数は、前活動に比較してかなり増えた。同じ被写体に何枚も写真を撮り、選択するという姿も見られ、かなりの成長ぶりであつた。

課題として残つたのは「話す内容・文章内容」である。写真の補助的説明として、1枚につき10秒という条件での文章を挿入することにしたが、「これは〇〇です。」といった箇条書きの文章がほとんどであり、写真への思いをより明確にしたり、強調したりする説明はほとんど見られなかつた。教師としては「写真では伝えきれない言葉の力」を期待したが、その力不足は否めず、下記にある保護者から子どもへのコメントでも、多く指摘を受けた。情報を「伝え合う」ための、「言葉」の存在を今一度考えねばならない。

《保護者からの評価カードコメント》：抜粋

- ・写真もきれいにとれているし、せつめいもきちっとできました。それぞれの説明に対応する写真の番号が、写真の下に書いてあるのもっとわかりやすかつた。
- ・素敵な場所がたくさんあるね。今度学校へ行ったら見てみるのが楽しみです。全部で40秒を少しすぎたけど上手に紹介できました。
- ・説明で書いているより、幅の広い紹介のお話しができました。「学校にある絵」というテーマに沿って、話ができていました。
- ・写真に沿ったナレーションは上手にできたと思います。しかしもう少しわしくどのような材料で作られているかを説明してほしいかつた。
- ・全体を通して具体例に欠けているのではないかと思いました。写真の案内だけでなく、実際に見たこと・体験したこと・感じたことを短く文章にも折り込んでほしいと思いました。
- ・大きな声で上手に読めました。大きなテレビやDVDは他の学校にはまだないかもしれませんね。ただ、説明するときこの紙以外の言葉を付け足すときには、少し注意しないとながりのない説明になっています。注意してがんばってね。
- ・もう少し上手に話してくれるとよかつたです。努力して一生懸命話してくれましたね。これからは、家族で今まで以上に会話することからはじめようね。人に伝えることの大切さを、たくさん勉強して下さい。
- ・まず、発表する際、しゃべるスピードが早く聞き取りにくい。また、プレゼンする際、どの写真について話すのか事前の説明があいまいで、どの写真について話そうとしているのか分かりづかつた。あと、説明している教室が、学校のどのあたりにあるかが分かるようであれば、なおよかつたと思う。写真については構図もよくわかりやすかつた。

④「ネチケット・情報モラル」に関する考察

～学習過程～ めざす児童の姿〔Rubric 4 A評価〕  
 ・写真やインターネットで使えるものを使っていけないものがあることを判断できる。

◆基礎→情報に対する基本的姿勢

1. 肖像権(写真)をめぐる問題  
 ・使っていい写真と使っていけない写真
2. 著作権をめぐる問題  
 ・「ネット社会の歩き方」のグループ体験
3. その他マナーの学習  
 ・メールや音楽データ・映像データに関するマナー
4. フラッシュメモリの使い方 データの管理  
 ・メモリへデータ転送 管理 データ活用

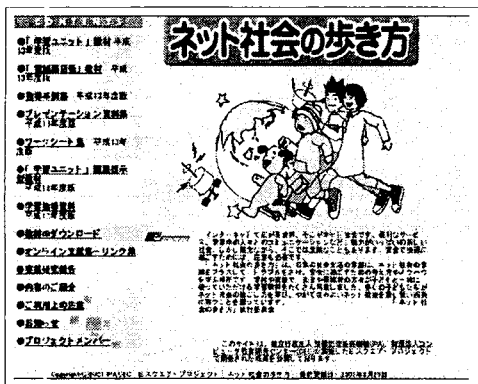


写真 10  
 「ネット社会の歩き方」

独立行政法人 情報処理振興機構(IPA)、財団法人コンピュータ教育開発センター(CEC)が実施したEスクエア・プロジェクトで開発されたもの

<http://www.cec.or.jp/net-walk/>

肖像権 = 自分の顔や姿をみだりに他人に撮影・描写公表などされない権利。人格権の一つとして認められている。

著作権 = 無体財産権の一。文芸・学術・美術・音楽の範囲に属する著作物をその著作者が独占的に支配して利益を受ける権利。著作物の複製・上演・演奏・放送・口述・上映・翻訳などを含む。原則として創作時から著作者の生存中および死後50年間存続する。

ネチケット = ネットワーク・エチケットを一語にまとめた造語。インターネットを利用する人が守るべき倫理的な基準。道徳。

※引用 : 「大辞泉」小学館編集部  
 「大辞林」三省堂  
 「パソコン用語事典」技術評論社

「学校の〇〇を家族に紹介する」というプレゼンの経験(実践1)を終え、「地域の〇〇を友達に紹介する」(実践2)への準備に入った。ここから、子どもは学校外の取材活動・撮影活動を行うことになる。そこで、他者への迷惑や社会的なルールを踏まえた上での、「情報モラル」について学習を行うこととした。

具体的には「撮っていい写真・撮ってはいけない写真」の判断をつけることを最優先の目的とした。プライバシーや肖像権の学習を通して、以下のようなルールを話し合いの中で設定した。

- ・誰が写っているかはっきりわかるような写真は撮らない 顔はできるだけ撮らない
- ・車のナンバーや住所がわかるような写真は撮らない
- ・他人の家を撮らない 他人の家から撮らない
- ・他人の写真を撮ったら、目的と使う理由を言って許可をもらう

以上のようなガイドラインを独自に設けたが、厳密になりすぎる故の障害が出た。公園を撮したものに全く人が存在せず、無意味な写真になったり、折角の気に入った写真を他人の家が入り込んでいたから削除したりといったことである。肖像権・プライバシーの限度を再考する必要がある。

次に発展として、ネチケット・著作権についての学習を、『ネット社会の歩き方』サイトを中心に行った。このサイトは2年前に作成されたものであり、小学生用のユニットを実際にパソコン上で操作しながら学習するものである。いくつかのテーマを選んで、グループごとに学習する時間を設けた。子どもの意識は「他人の作ったものは使ってはいけない」という意識に流れがちだが、あくまでも「他人の作ったものを使うときには、許可を受けることが必要である・使う目的と使う場所をはっきりさせる必要がある」を基本的スタンスとして学習させた。

これら情報モラルについては、本校情報教育で重視している「コミュニケーションの媒体としてIT・デジタルコンテンツの活用を授業に位置づける」上での、配慮事項であり、学習時期は中学年での学習が最も効果的だと考えられる。

さらに発展し、自らのデータを管理する意味と責任を持たすために、保護者の了解を得て、128MBのフラッシュメモリを全員に持たせた。データを自ら管理する責任を自覚させる上で効果的であった。さらに、様々なパソコンでデータを利用する上で持ち運びが簡単であり、好評であった。加えて、各家庭のデジタルカメラで撮った写真の、データのみをメモリに収めて学校に持ってくるのができたし、学校で撮影したデータを家庭に戻すことも簡単である。以後の学習に大きな活用の期待ができるものであった。



写真 11 データの保存  
 128MBのフラッシュメモリを使って、データを保存する作業。

⑤「友達を対象にした地域紹介（実践2）」に関する考察

～学習過程～

めざす児童の姿

- ★伝える側 [Rubric 5 A評価]
  - ・写真や話の順番を考えて計画を立てることができる
- ★受ける側 [Rubric 6 A評価]
  - ・作品の工夫をするとともに 友だちの作品にアドバイスができる

◆収集→写真撮影・画像収集・取材  
 ◆処理→撮影・画像の見方や選び方・データの整理  
 ◆表現→プレゼンテーションの作成・交流会

1. プレゼン計画の作成
  - ・伝える相手、目的、内容
2. 取材活動（課外）
  - ・画像撮影と選択 ・取材 ・文章作成
3. 練習・リハーサル
  - ・画像の並び替え ・文章の検討変更
  - ・4枚の写真と10秒のお話 リハーサル
  - ・友達同士やグループ内での練習発表 相互評価
4. 交流会での発表
  - ・各自の発表と相互評価
  - ・評価カードによる学習のふりかえり

他教科での関連学習

国語科「分類ということ」：目的に応じた分類紹介文  
 理科「月や星の動き」：プレゼンソフトの活用  
 社会科「住みよいくらしをささえる」：調査発表 相互評価

実践2として、伝える対象を友達にし住んでいる地域を紹介内容にするプレゼン作成と発表（交流会）を行った。実践1と大きく違う点は以下の4点である。

- ◆4枚の写真にストーリー性を持たせる
  - ・「4コマ」写真であることを意識して、話の内容に一貫性を持たせ、オチのあるストーリーをつくる必要がある。
- ◆撮影・取材が全て課外活動になる
  - ・撮影や取材は各々の地域で行われる。デジカメはほとんどが自宅のもの（使えない場合は学校のデジカメを貸し出し）で、フラッシュメモリにデータを入れて、学校にて編集。
- ◆プレゼンソフト（PhotonicK）を用いて発表する
  - ・実践1ではプリントアウトした写真を用いたが、実践2の本番はプレゼンソフトを使う。なお発表は、CP室正面のスクリーンで行う
- ◆発表（交流会）でお互いの作品を評価し合う
  - ・発表は全員の前で行う。一人一人の作品に対して議論するのは大変なので、評価カードをつくり、相互評価することとした。

実践1に比べて、かなり高度な作業が必要になるものの、一度経験した学習の発展としてとらえ、比較的順調に作業は進み、どの子も計画通りに作品をつくり上げることができた。

特に、4枚の写真にストーリー性を持たせることについては、本校情報教育の目標である「情報活用の実践力を培う」ことにかかわる重要な作業と位置づけた。つまり単に4枚の写真を意味なくつなげ、事実説明だけをするのでは、情報を「伝え合う」レベルにはないと考えたからである。実践力を培うには、必要な情報を整理し意図や目的が明確になるような表現・発信が必要であり、本実践を通じて、伝える対象に思いが伝わるための工夫や努力が必要となると考えた。その工夫の一つの姿が「ストーリー性のある内容」であり、そのためには画像の選択・並べ方、話す内容の吟味が大切な要素になる。

また、発表（交流会）の場では、お互いの作品を評価し合う観点として「発表者の思いが、画像・話す内容・話し方に現れたか？」を第1項目にした。まだまだ稚拙な作品も多いが、計画・作成・発表を経て、各々の「伝え合う活動」に磨きがかかったことは確かであり、各教科の学習に生かされていくと思われる。

表5：実践2のワークシート

地いきの【 】を友達に伝えよう

◆とった写真の枚数 枚 複式： \_\_\_\_\_

どんなことを伝えますか？（計画）

写真① \_\_\_\_\_

写真② \_\_\_\_\_

写真③ \_\_\_\_\_

写真④ \_\_\_\_\_

★みんなから教えてもらったこと★

写真12 H児のプレゼン作成

写真画像を取り込み22枚から4枚を選び出し、話の順番に並び替える作業。



写真13 N児のリハーサル

実際に並べた4枚の写真にコメントを載せ、各10秒以内に収まるようにリハーサル作業。

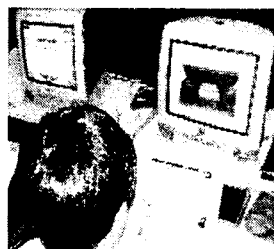


表5：実践2における学習状況

児童	撮影枚数	発表テーマ	校区：主な内容
A児	3男	16	すごいところ 額：自然が残る所と宅地化する所の比較
B児	3男	15	都市部の施設 新鷺町：美術館、観光会館など公共施設
C児	3男	16	泉野小学校 泉野：出身の泉野小を4つの視点から
D児	3男	15	かわってきた町 三馬：田園地帯に増えるコンビニなど
E児	3男	12	おもしろい所 津幡条南：新図書館や公園などの施設
F児	3男	19	家の庭 諸江町：近所、庭で育てる野菜の紹介
G児	3女	20	私の好きなところ 森本：自然に恵まれた近隣の様子
H児	3女	22	すてきな所 田上：卯辰山や金大など近隣の紹介
I児	3女	12	驚くところ 額：最近建った新しい公共施設など
J児	3女	9	店・公園・浜 粟崎：海辺の公園や浜の様子 海を主体
K児	3女	22	夕日寺 夕日寺：新築の小学校、東と西の公園施設
L児	3女	12	知ったこと 小立野：出身小学校の通学路や秘密の場所
M児	4男	19	山・建物・碑 扇台：高尾山や富樫の碑など歴史関係
N児	4男	20	金沢駅 長田町：鼓門や西口など金沢駅の特長
O児	4男	20	建物 伏見台：最近建った近所の珍しい建物
P児	4男	22	法島町 十一屋：犀川の橋、坂の由来など
Q児	4男	7	家の周辺 鞍月：新県庁、関連施設 新しい建物
R児	4男	8	けしき 材木町：家から見える市内 卯辰山
S児	4男	19	古いもの 緑：校区の遺跡や神社など歴史関係
T児	4男	11	公園 長坂台：大乗寺丘陵公園の特長
U児	4女	17	ふしぎなところ 泉野：三角公園、図書館などの施設
V児	4女	19	公園 長坂台：大乗寺丘陵公園から見た市内
W児	4女	16	好きなところ 泉野：小学校、公共施設、公園など
X児	4女	5	建物と特徴 伏見台：近所にある珍しい建物の説明



写真14 全体の打ち合わせ  
作業の進め方について確認し、  
各自の計画を進める。



写真15 全体の打ち合わせ  
教師の作成プレゼンの問題点を  
出し合い、自分の作品に生かす。



写真16 グループ活動  
全体への発表の前に、グループ  
ごとにリハーサルをする活動。

ここでは、交流（発表会）の場における子どもの様子や教師の手だてを検証したい。交流の場は、ほとんどの子が初めてのプレゼン発表であり、なかなかリハーサル通りにいかなかったようである。ある程度の予想はされたので、意図的に4年生の話し方の上手な子からスタートさせた。画像の質や話す内容は変更できないが、話し方は模範になった。特に、「問のとり方」「原稿を暗記して聞き手の方を向いて話すこと」「強弱をつけた話し方」などが、後から発表する子どもの手本になっていた。

相互評価の場では、観点を「画像」「話す内容」「話し方」の3点に終始絞り強調していたことが功を奏し、「よさ」を充分評価してあげることができた。自分の作品と比べて、そのよさを述べるができる子もいたが、友達のよさを自分の作品に反映させる作業の時間を持てなかったのが残念であった。



写真17 交流会での意見発表  
友達作品のよさを認め合う。

次の活動につながる課題として残ったことは、子どもの画像に対する要求が高まったことである。具体的には、画像の加工を希望する声が多くなったことである。つまり、「背景の不必要なものを除去したい」「画像を明るくしたい」「余分な部分をカットしたい＝トリミング」「文字や模様を入れたい」といった要求である。自分の伝えたいことをより強調するため、10秒のお話しに続き、画像自体の加工処理を希望した声であり、なんらかの機会に、画像処理ソフトのレクチャーが必要だと痛感した。

また、音声を入れることや動画を扱いたいという希望も4年生から出された。

⑥「Rubricを活用した評価活動」に関する考察

複式学級では、別紙「合科プラン」に基づき、総合学習の評価にRubricを用いている。よって本単元において7回設定した。

複式学級で用いるRubricの特徴は2点ある。1つ目は、指導者側が学習の流れを想定し作成した意図的要素の強い項目であること2つ目は、数値的な集計だけでなく、「なぜこう決めたのか」「これからどうするか」という2カ所の記述の場を設けていることである。この記述により、児童の変容の様子や次活動へのねらい、さらには指導者から個々へフィードバックすべきことが明確に現れてきた。本校情報教育の理論に記述されている「見取りと評価のフィードバック」の一方策として、大変有用なものであった。個々の記述を分析することは大変意味あることであるが、莫大な量がある。この後は、数量的な特徴から、成果と課題を述べていきたい。

表6：Rubric個人票の基本書式

評価対象	A	B	C	D
	評価項目文	評価項目文	評価項目文	評価項目文
	4	3	2	1
なぜこう決めたのか				
これからどうするか				

《複式学級でのRubricの定義》

評価の対象となる活動に対して、4個の評価項目（基準）を設定し、児童自身が自己評価し、次の学習に生かすもの。

① デジタルカメラの使い方	A	B	C	D
	・目的にあった写真を何枚もきれいに撮ることができた。	・どんな写真をとるか自分で決めて、何枚か撮った。	・デジカメの使い方がわかり写真をとることができた。	・デジカメの使い方がわからない。写真がとれなかった。
	5人	16人	3人	0人

デジタルカメラ操作の経験者ではなくても、大体の基本操作は習得できたことが伺える。Cとした子の中には、気に入った写真が撮れなかったことを原因に挙げる子が数名いた。

② スライドソフト	A	B	C	D
	・写真の順番をくふうしてわかりやすく発表できた。	・目的にあったスライドショーを作ることができた。	・スライドショーを使うことができた。	・スライドショーを使えなかった。
	13人	10人	0人	0人

(欠席1人)

プレゼンソフト (Photonick) は、機能は少ないが画像を選択しスライドショーを行うには最適であり、操作も簡単で好評であった。プレゼンのねらい・目的をはっきり決めてから使ったことで、A評価が多かった。

③ 学校の紹介 (家の人へ)	A	B	C	D
	・自分の目的にあった発表をし家族にしっかり伝えることができた。	・写真にお話を入れて家族にしようかいうことができた。	・写真だけを家族に見せることができた。	・家族に発表できなかった。
	7人	16人	0人	0人

(欠席1人)

若干評価が甘いように感じる。項目設定の仕方にも問題があった。保護者から寄せられた評価カードには具体的な改善点など記されており、個々へのフィードバックはできた。

④ マナーのお話	A	B	C	D
	・写真やインターネットで使えるものを使っていけないもののはんだんができた。	・マナーの話がわかりとっていい写真といけない写真の違いがわかった。	・マナーの話がわかったが、区別はできない。	・マナーの話がわからなかった。
	15人	8人	0人	0人

(欠席1人)

大体の話を理解されたようであり、以後の写真にも「肖像権」「プライバシー」を意識した様子が見られた。過剰意識しすぎた子もいて、フォローも必要であった。

⑤ 地いき紹介 の計画	A	B	C	D
	・写真やお話の順番を考えて計画を立てることができた。	・写真と紹介文の計画を立てることができた。	・どんな写真をとるか計画を立てることができた。	・計画を立てることができなかった。
	9人	14人	0人	0人

(欠席1人)

実践1と比較すれば、計画はスムーズであり、撮影した画像の枚数や取材内容も充実しており、計画段階ではどの子も順調なスタートを切れた。

⑥ 地いき紹介 の交流会	A	B	C	D
	・作品の工夫をするともに 友達の作品にアドバイスができた。	・グループ交流会をもっとも作品の工夫をした。	・グループ交流会で発表ができた。	・グループ交流会で発表できなかった。
	6人	15人	3人	0人

実際に発表したり友達の作品を鑑賞したりという活動では、計画通りにいかないことがあったようだ。3年生と4年生の差も顕著に表れ、個々に課題が多く残った部分であった。

⑦ 学習全体の まとめ	A	B	C	D
	・友達の作品のよさを生かしながら わかりやすい紹介を作り発表では家族や友達に喜んでもらった。	・家族や友達に紹介することを意識して作品を作り 友達にアドバイスができた。	・いろいろな活動を一人でできた。家族や友達に紹介した。	・いろいろな活動を一人でできなかった。
	11人	11人	2人	0人

学習全般を通して、D評価の子がなく、C評価でも「課題・問題点」が明確になっているので、単元の学習としてはよかったと判断できる。

Rubricを作成する側としては、子どもの立場から「客観的に自己評価できる」ような基準を項目としてあげる必要があると分かった。主観的に「よかった・わるかった」という評価では、どうしても自己評価が甘くなるものである。むしろ、技能習得項目に限定して「できた・できなかった」という評価の方が判断しやすい。「学びを深めようとする思い」を見取り・評価するのは、記述部分の充実でフォローできると思われる。ともあれ、以後の総合単元で設定するRubricでは、判断しやすい項目を設定し、徐々に子どもに項目を作らせるような評価活動に代えていきたい。

## (6) 単元を終えて

まず課題となるのが、学習時数の確保である。前述したように、本校の情報関係技能取得のための時数は10時間(総合に特設)である。複式学級では、合科プランを設定し他教科の時数も使うことにしている。とはいえ、本単元で特設時数は使い果たしてしまっている。さらに、課外での撮影や取材・機器のスキルを扱う時間がかなり多かった。今後は、総合での時数確保と、他教科のカリキュラムを再考する必要がある。

本校の研究に即して合科プランを設定し年間通して「調べる活動」「まとめる活動」「伝え合う活動」を位置づけたが、一単元に全てを盛り込むことは現段階では難しいことが明らかになった。中学年では、「調べる活動」「まとめる活動」の経験を充分踏まえた上で「伝え合う活動」が成立するのである。総合の各単元の学習計画を、今一度見直すこととした。

複式学級の特質ではあるが、3年生と4年生の技能の差や意識の違いが課題であった。例えば、プレゼンにおけるめあてが、3年生は「話し方」中心であったが、4年生は「画像・文章内容」が多かった。また、4年生は撮影した静止画像で満足せず、画像処理加工や動画の扱いを希望しているが、3年生にはまだその意識はない。学年や個に応じた指導・内容にも限度がある。個の学習意欲を満ちし、効果的な学習ができるようTTも視野に入れたい。

今後の単元では、「伝え合う」対象を他学年・他校・全国へと広げるとともに、「思い」を正確に整理して伝えることができるメディアの活用を目指していきたいと考えている。



## 実践例 ー5年ー

### (1) 単元名 インタビュー名人になろう

- (2) 目標 目的に沿って尋ねることを整理し、相手にわかりやすく話したり、答えを正確に聞いたりすることができる。  
友だちのインタビューの様子からよい点・工夫したらよい点を受けとり、自分のこれからのインタビュー活動に生かすことができる。

### (3) 指導にあたって

#### ① 教材のとらえ

5年生ともなると、様々な教科、場面で人に会って話を聞くこと、すなわちインタビューをする機会も多くなる。一方的に聞きたいことのみを尋ねるのではなくて、相手とのやり取りを工夫したりすると、生きたインタビューになって、思いがけない情報に出会うこともある。今までのインタビュー経験をふり返らせ、一步上のインタビューをめざし、今後の様々な場面で生かせるようにしたい。

また、ここでのインタビューは、相手の考えを予想し臨機応変に対応していきながら、自分の知りたい知識や情報を得ていくという活動であるから手段としてのインタビューであることが求められる。事前に考えた質問事項だけを聞き、相手の答えだけをメモすればよいというものではない。目的、相手の立場を意識し、相手にあわせた反応、予想外の答えが返ってきた時の切り返し、さらに情報を引き出したい時の追求の仕方など、まさに「伝え合う場」でのコミュニケーションが必要とされる。学年当初に「伝え合う」ことの良さを共有させたいと考えこの単元を設定した。

そのために国語科、社会科、総合を組み合わせることが効果的であると考え、インタビューの目的、条件、などの基本的なことを国語科で学習し、社会科でその視点を学び、総合で実際にインタビュー活動を行うという教科横断の単元構成を試みた。このような単元構成をすることで国語科で学んだことをすぐに実践に移せるという効果を見込むこともできる。

#### ② 本単元における「学びを深めようとする思い」

情報教育における「学びを深めようとする思い」は「伝え合おう」とする思いである。これを本単元における「学びを深めようとする思い」に置き換えると、自分の聞きたいことを相手に正確に伝え、聞きたいことを引き出し、さらに相手の話に合わせて聞き出すことでより深い、または広い学びを獲得していこうとする思いである。

○インタビューを通して自分の知りたいことを正確に相手に伝え、相手の言いたいことを正確に受け取ったり、相手の話に応じて受け答えすることで目的とした情報を収集しようとする  
ことができる。そのことの良さを知り、もっと深く聞いてみたい、調べてみたいという思いを深めることができる。

○お互いのインタビュー活動を相互評価する中で相手の良さや改善点を見つけ互いに共有することで今後の「伝え合う活動」に生かしていこうとする思いを持つことができる。

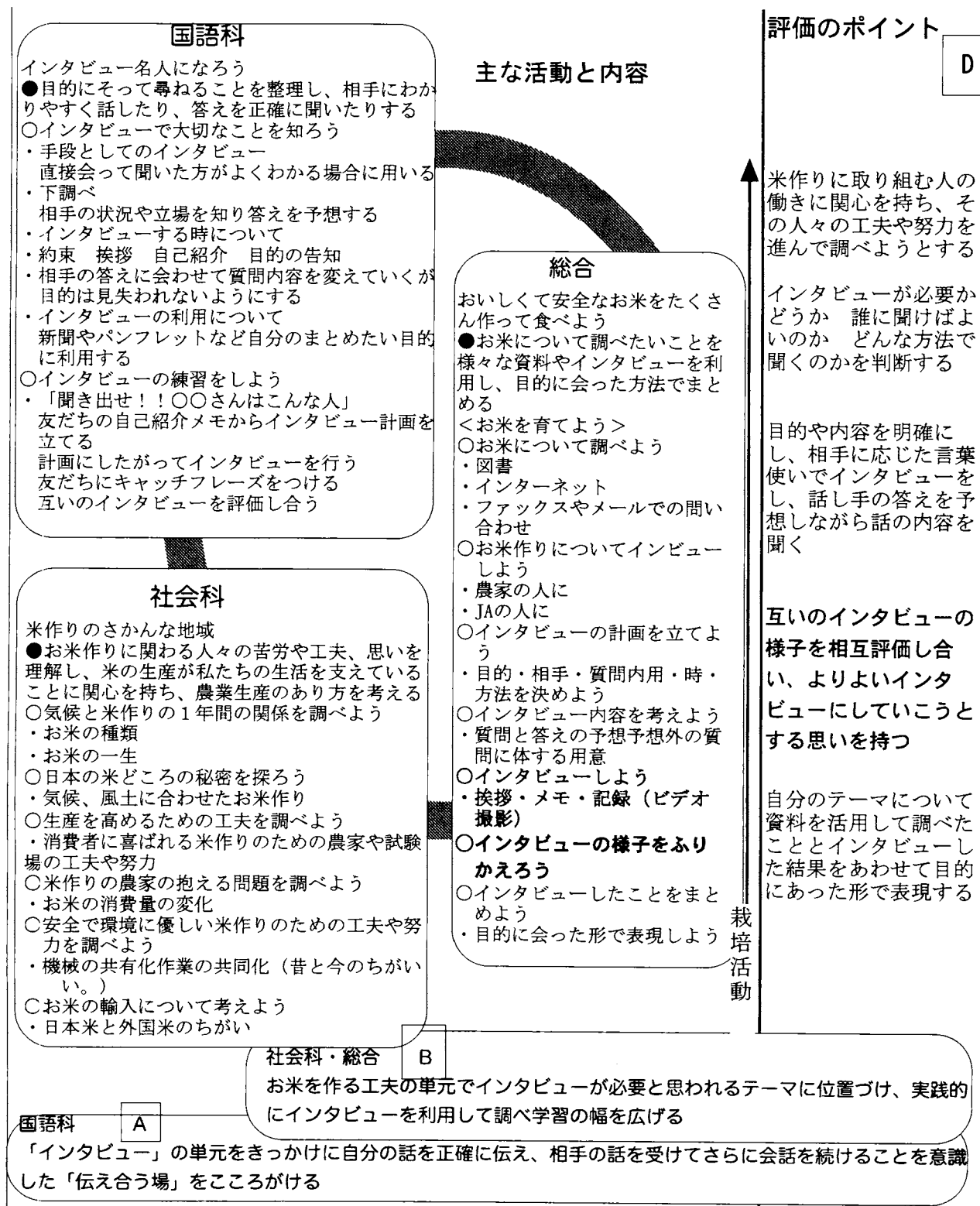
#### ③ 「学びを深めようとする思い」を育むために

「かかわって学習を進めていこう」という子どもの思いを「もっと深めていこう」という姿に高めるために、4月から「自分から」「かかわり」「進める」をキーワードに授業を行ってきた。自分から進んで参加、行動し、ほかの友だちとかかわることとを大切に、次に進める行動や発言を認め、広めてきた。一方的に「この行動には価値があるよ。」と押し付けるのではなく、なぜ今の行動がよかったのか、どういう思いから出た行動なのかをその場でみんなで考える場を作ってきた。また、「伝え合う活動」では新聞の写真をOHCに映して新聞内容をスピーチする活動、それに対して友だち、教師がコメントする活動を4月から毎日行ってきた。最初は聞く方のコメントも「すらすら言えました。」とか「はっきり聞きやすかったです。」など表現方法に関するものが多かったが、教師の方から文章構成や内容に関わるコメントを意図的に話すことも取り入れてきたところ、子ども達からも内容に関するコメント多くなってきている。

本単元ではコミュニケーションを活性化するために次のような単元構成を試みる。国語科の「インタビュー名人になろう」の学習で学んだ「自分の考えを正確に伝え、相手の話を受けとつ

て会話を継続することでより相手の考えを知ろうとする」コミュニケーションのスキルを、社会科や総合学習で実践的に生かせるように合科的な単元構成をした。国語科だけの学習でインタビューの条件をすべて備えた話し方をできるようになることは困難である。そこで、他教科の学習の中でもインタビューの機会を多く取り入れることにした。また、その他の教科や日常生活の中に、双方向的な話し言葉の学習を組み込み、継続して力を積み上げていくように心がける。積み上げていくためには、教師が子どもの変容をしっかりとらえるとともに、教科の認知的側面をしっかりとらえて体験主義にならないような授業展開をしていくことが重要であると考え。

#### (4) 単元計画 (総合・総時数 10 時間)



### 評価のポイント

D

米作りに取り組む人の働きに関心を持ち、その人々の工夫や努力を進んで調べようとする

インタビューが必要かどうか 誰に聞けばよいのか どんな方法で聞くのかを判断する

目的や内容を明確にし、相手に応じた言葉使いでインタビューをし、話し手の答えを予想しながら話の内容を聞く

互いのインタビューの様子を相互評価し合い、よりよいインタビューにしていこうとする思いを持つ

自分のテーマについて資料を活用して調べたこととインタビューした結果をあわせて目的にあった形で表現する

### 社会科・総合

B

お米を作る工夫の単元でインタビューが必要と思われるテーマに位置づけ、実践的にインタビューを利用して調べ学習の幅を広げる

### 国語科

A

「インタビュー」の単元をきっかけに自分の話を正確に伝え、相手の話を受けてさらに会話を続けることを意識した「伝え合う場」をこころがける

### 栽培活動

1学期 お米を調べよう	きこく	<b>身近で作っているお米を見つめ直そう</b> ●おこめの種類を調べよう ●自分達が育てるお米調べ ・田んぼカレンダー作成	2学期 お米から文化・社会を調べる	みこめる	<b>お米から食料問題・環境問題考えよう</b> ●稲の刈り取り ・天日干し ・脱穀 ・もみすり ・品質検査 ●精米 ●収穫を喜ぼう。「ごはんを食べよう!!」 お世話になった方を招いてライスクッキング ●食生活の見直し ・コンビニ弁当・外食・食品添加物・輸入品 ●お正月の料理の風習 ・お雑煮の地域での違い ●世界の食料事情を知ろう ・世界のお米料理にチャレンジ ・料理から世界の文化、経済を知る	社会 これからの食糧生産 環境問題
	かかわる	●バケツ稲を育てよう ・バケツ稲の田植え ・これからの世話の仕方 ・肥料の与え方・水の管理の仕方 ●バケツ稲の生き物調査 ・どんな生き物が住んでいるのか ・害虫が寄生しているか 発生するとどうなるのか ●害虫駆除についての対応 ・農薬の害や利点について調べる ・どうしたら無農薬で育てられるかを調べる ●夏休みの水管理と観察		●稲の刈り取り ・天日干し ・脱穀 ・もみすり ・品質検査 ●精米 ●収穫を喜ぼう。「ごはんを食べよう!!」 お世話になった方を招いてライスクッキング ●食生活の見直し ・コンビニ弁当・外食・食品添加物・輸入品 ●お正月の料理の風習 ・お雑煮の地域での違い ●世界の食料事情を知ろう ・世界のお米料理にチャレンジ ・料理から世界の文化、経済を知る		
2学期 お米がいて未来を夢見る	いかす	<b>お米作りの「今」を見つめ直そう</b>			社会 私達の国と環境	
		●地域の農業を見つめ直す ・生産者、消費者、行政、自然保護の立場から				
		<b>これからできることを考えよう</b>				
			●おこめフォーラムを開こう ・自分達から行動しよう ・周りに広めていこう。			

(5) 本単元における授業の実際と考察

情報教育における「学びを深めようとする思い」は「伝え合おう」とする思いである。本単元における「学びを深めようとする思い」は、自分の聞きたいことを相手に正確に伝え、その答からさらに情報を引き出すことで、より深く広い学びを獲得していこうとする思いである。具体的には以下のような思いである。

- ・自分の知りたい内容を正確に相手に伝え、相手の言いたいことを正確に受けとる。そのことのよさを知り、もっと深く聞いてみたい、調べてみたいという思いを深める。
- ・お互いのインタビュー活動を相互評価することを通して、相手のよさや改善点を見つけ、互いに共有することで、今後の「伝え合う活動」に生かしていこうとする思いを持つ。

このような思いを育むための手だてに樹点を置いて単元を構想した。(図1)

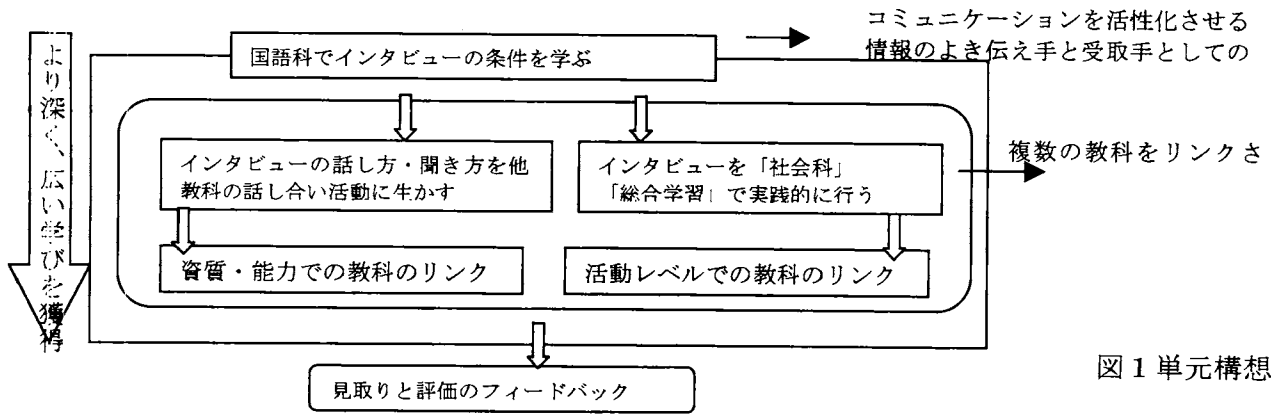


図1 単元構想図

本単元の実践を次の①～②の視点から本単元の学習過程を考察する。

- ① コミュニケーションを活性化させる <単元計画A 教科理論3 (1)>
  - ア 情報のよき伝え手と受取り手としての基礎基本
  - イ 外部の人との交流
- ② 関連する教科をリンクする <単元計画B 教科理論1>
  - ア インタビューの話し方・聞き方を他教科の話し合い活動に生かす
  - イ 「社会科」「総合学習」でインタビューを実践的に行う

- ① コミュニケーションを活性化させる
  - ア 情報のよき伝え手と受け取り手としての基礎基本
    - 国語科でインタビューの条件を学ぶ-

国語科の「インタビュー名人になろう」の単元で情報のよき伝え手と受け取り手としての基礎基本を学ぶ。ここでの基礎基本を以下のように考えた。

- ・自分の考えをしっかりと持ち、わからないことを明らかにして相手に問うことができる。
- ・相手の答に対して臨機応変に対応し、ほしい情報を引き出すことができる

学期当初のこの時期に相手と会話をつなげることを通して、自分の学びを深める方法を学ばせたいと考えた。子どもの実態として、自分の考えはしっかり言える子が多く、友だちの話も「わかりません」「もう一度言ってください」などの疑問を返すことができる。しかし、相手の答えに対して、「わかりました」で終わることが多く、それ以上聞き出すことはほとんどなかった。言っていることの意味がわかればそれでよしとする。それ以上追求していくことで、もっと自分のほしい情報が手に入ったり、新しい考えを知ることができる良さを知らないのである。「伝え合う場」で学びを深めようとする思いを育むためには双方向のコミュニケーションが不可欠である。それには「インタビュー」が効果的であると考えた。インタビューの条件を明らかにし、実際に相手から情報を引き出すための下調べをしたり、相手の立場に立って相手の言っていることを引き出すというコミュニケーションは他の教科や総合、特別活動等の話し合い活動、つまり「伝え合う場」に生かされていく。

—インタビューの目的を明らかにする—

-学習活動の流れ-

○インタビューの目的を明らかにする

1 インタビューの目的について話し合う

何のために  
どんな時に  
だれに  
その結果をどう使うのか

インタビューは自分が知りたいことを、そのことをよく知っている人に聞くことで、はっきりさせること。

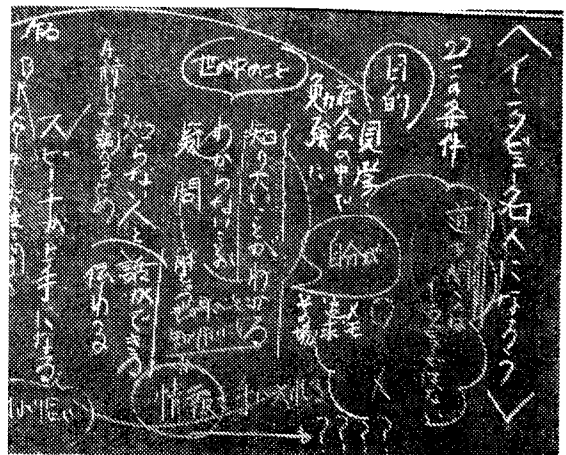


写真1 目的をあらかじめにする時間の板書

子どものインタビューの経験はさまざまである。そこで、最初の時間は今までのインタビュー活動を振り返らせ、インタビューの目的を共通認識す

る必要がある。「インタビュー名人になるとどんないいことがあるのかな？」と投げかけ、インタビューの目的を話し合った。子どもの発言から、情報や知識を相手から手に入れることであるという発言が多く見られた。そのために、インタビューは、相手の答えを予想し、臨機応変に対応していくことが、大切であること、つまり「伝え合う場」での目的意識、相手意識を持つことが重要であることが確認できた。

(写真1)

### —インタビューの条件を明らかにする—

#### ○インタビュー名人の条件を明らかにする

##### 2 インタビュー名人の条件を話し合う

- ・ 今までの経験から話し合う
- ・ 道聞くことはインタビューか？

YES or NO

##### YES

- ・ わからないことを聞いて、知りたいことを知るのだからインタビューになる
- ・ どんな形でもよく知っている人に聞くことがインタビューだと思う

##### NO

- ・ 相手がよく知っている人だとは限らない
- ・ 話がそれだけで、終わってしまう
- ・ 知りたいことはわかるけれど、それ以上話が広まらないし、追求することができない

どちらとも言えない

- ・ 道聞くだけだとインタビューとは言えないけれど、そこからもっと追求して、他のことまで聞く場合はインタビューと言える
- ・ インタビューの条件を決定する。

- ・ 相手を決める
- ・ 事前に（最初から）聞くことを用意しておく
- ・ 相手の意見を予想する
- ・ 相手の意見を聞いてさらに追求していく
- ・ コメントをつけながら聞く

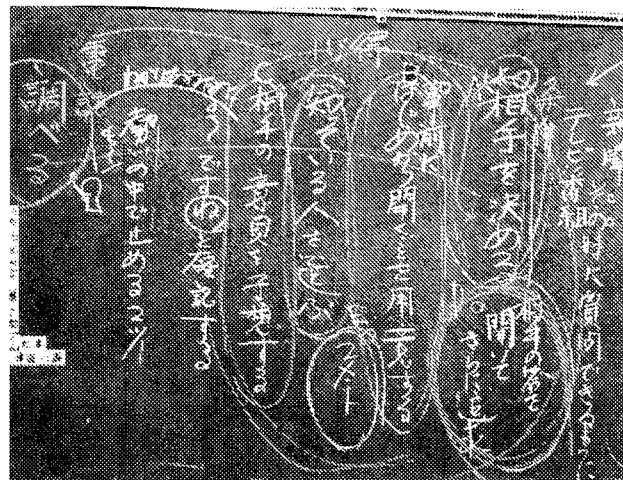


写真2 条件を明らかにする時間の板書

次に相手の答えを予想し、臨機応変に対応するための条件を「インタビュー名人になるための条件」とし、それを話し合った。これからの「伝え合う場」でのコミュニケーションの基礎にしたいと考えていたので、時間をかけて話し合った。今までの経験からたくさんの意見が出てきた。それを集約するうちに、ある子どもから「道を尋ねることはインタビューになるのか？ならないのか？」という疑問が提案

された。YES派とNO派に分かれて議論することで、インタビューの条件がはっきりしてきた。インタビューの相手は偶然いた人ではなくて、目的を持って選ぶこと、内容は決めておいた質問だけでなくさらに追求していけるものであること、などの意見が子どもから出された。この議論を持つことはインタビューの条件を明らかにするために効果があった。

この話し合いで、子どもが決めたインタビューの条件を使って相手の話を聞き出そうとする姿をこれからの学習の中でフィードバックし、共有化していく。

(写真2)

### —インタビューする相手に対する気配りや正しい礼儀を心がけることを知る—

#### ○インタビューする相手に対する気配りや正しい礼儀を心がけることを知る

##### 3 教科書添付のCDを聞いて自分たちの考えた条件に足りないところを見つける

- ・ 相手に対する気配りや礼儀を持つ
- ・ 予想しない答えが返ってきた時の切り返しをする
- ・ 相手の答に対する相づちを打つ

子どもが話し合って決めたインタビューの条件には「相手に対する気配りやていねいな言葉使い」という項目がなかった。それらは「情報社会に参画する態度」の基本である。学年当初のこの時期にしっかりと、意識させ、他の人と交流させたい。そこで、教科書添付CDを聞かせた。これは、実際に「まんがクラブの活動の様子」をインタビューしている様子がわかるCDである。ていねいな言葉使いや、ふさわしい相づち、反応がよくわかるようになっている。これを聞くことで相手

に対する気配りに気がついた。それ以外に、自分が予想していなかった答えが返ってきた時に、そこで話が終わるのではなくて、切り直す方法があることも見つけることができた。

-条件を使って実際にインタビューをする-

○インタビューの条件を意識して実際にインタビューしてみる

4 友だち同士でインタビューをし合う  
聞き出せ! 「〇〇さんって、こんな人」  
・「わたしメモ」を作る(図2)  
・二人1組になって「わたしメモ」を交換する  
・友だちの「わたしメモ」を見て質問を考える(図3)  
・インタビューをする  
・ペアを変えてもう一度インタビューする  
・わかったことと感想を発表する  
「〇〇さんは△△」のキャッチフレーズを作る

<インタビューの前に>  
・相手のことがわかるような追求の仕方しよう  
・相手の答をより引き出すような工夫しよう  
・自分が聞きたいことをはっきり伝えよう  
・相手ももっと話してみようと思うあいづちを打とう

<インタビューが終わって>  
・理由を聞けばもっと話が続いたかもしれない、  
・自然な感じで話が続けられなかった  
・いろいろ聞いていくと、今まで思っていたのと違う面が見られた  
・何年もしょよかったのに、知らないことがわかって、なぜか近くに感じるようになった

今までに話し合っではっきりさせてきた条件を実際に使ってインタビューを行う。友だち同士で二人1組になってインタビューをしたり、されたりする。3分間のインタビューで、友だちのことがどこまでわかるのか挑戦する。自分の知りたいことを正確に相手に伝え、相手の言いたいことを正確に受け取ることの良さを知り、もっと深く聞いてみたい、調べてみたいという思いを深める場としてとらえた。

子どもは下調べの段階で、できるだけ相手の話を引き出すことを重点的に考えていた。そのために、相手の考えを予想すること、それに対する対応を考えておくこと、予想外の答えの対処を考えておくことに下調べの段階で取り組んでいた。インタビューの条件に一つずつ照らし合わせて準備する子ども、フローチャートのようにしていくものパターンを考える子ども、どの子どもも、どこでどのように追求すれば会話が続けるのかを

それぞれに工夫して準備した。

インタビューの間は、なんとか相手の話にそってつなげようとする姿、予想しない答の切り返しに工夫する姿、ていねいな言葉使いに気を配る姿など、自分たちの決めたインタビューの条件をよりどころにコミュニケーションしようとする姿が見られた。

インタビューが終わった後の感想では、会話を途切れさせずに続けることの難しさや、さらに追求していく時のその場の臨機応変の判断のむずかしさなど、インタビューの条件にかかわるふり返りが多く聞かれた。さらに「今までよく知っていたと思ったのに知らなかったことがいっぱいあった」「もっと近い感じになれた」「同じことに興味があることがわかった」など、友達を見直に感じている感想も多く出された。相手の話すことをもっと深めて聞いてみたいという思いの現れである。

いくつかのグループのインタビューの様子を見て、その良さを互いに認め合う活動も取り入れた。相手の言いたいことを引き出している良さを知り、自分のインタビューのやり方と比べ、次に生かしていこうとする思いも持つことができた。(資料1)

ただ、質問内容が簡単な事柄であったため、追求するにしても限度があった。そのため、重点は会話をつなげることに置かれ、同じことを繰り返して聞くような、あまり意味のないように思われるやり取りも見られたことが課題として残った。

今日の学習のふりかえりをしましょう

思ったこと	インタビューが上手な人は、インタビューをきこちなくしているのではなく、会話のようにやられているんだなと思いました。
かかわり	友達と練習していくことによって友達の意外なところも知りました。
まとめ	インタビューをするときは、相手の目を見てするといいうちがすくのもいい。

マロウソウのつくりかたをさがそう

思ったこと	今まで、インタビューといえは、質問してメモを取るだけか、かいたか聞いたか、わかんないところを、質問、聞いてみた。
かかわり	実際にやってみて相手の事がよく分かったし、自分の意見を言える所が思ってたより良かったです。
まとめ	インタビューでまを付ける事(作ってみて) ・答の予想はよく聞いて、相手を見て、質問のしかたもかいてみる。聞きかたもきかた

資料1 友達同士のインタビューを互いに評価したカード

イ 外部の人との交流

社会科でお米作りに関わる調べ学習をおこなった。そこから疑問に思ったことを専門家にインタビューすることにした。農業試験場、北陸農政局、農家の人、JAと聞く相手ごとにグループを作った。その中の農家の人へのインタビューグループが実際にインタビューしている場面を他の子ども達に聞かせ、聞き取った情報、インタビューの評価を行うことにした。ここでは、「伝え合う場」を二つ構想する。一つは農家の人へのインタビューグループが外部の農家の方と「伝え合う場」。もう一つはインタビューグ

つは農家の人へのインタビューグループが外部の農家の方と「伝え合う場」。もう一つはインタビューグループと聞いている他の子ども達との「伝え合う場」である。今まで、教室の中だけで行ってきたインタビュー活動を、外部の人と行うことで、専門的な情報、気づかなかった新しい知識を得ることができると考えた。そこで、調べ学習をより深めようとする思いを持ち、それが社会科のねらいに迫ることになると考

えた。また、実際のインタビューを相互評価することで、友達同士のインタビューで見られたコミュニケーションにも無意味なものがあったことに気づき、本当に情報を得るための手段としてインタビューの内容を見直すことにつながる。

農家の方は兼業農家で、農業関係の行政のお仕事をしながら、地域の学校にも米作りのアドバイスに通っておられる方である。

農家の人にインタビューグループ5人の質問は以下の4点である。

○インタビューの条件を意識して専門家の方に  
実際にインタビューしてみる

- 5 専門家の方にわからないことをインタビューする。  
～兼業農家の室塚さんにインタビュー～
- ・農家の人のお米作りの苦勞（田植えや水管理などのそれぞれの作業について）
  - ・農家の人のご苦労（減反や、お米の消費量が減っていることについて）
  - ・農家の人が一番工夫して取り組んでいることについて
  - ・農家の人にとって「ズバリ！！お米作りとは？」

農家グループはインタビューし、他のみんなは

- ・インタビューでわかったこと
  - ・インタビューの評価
- をワークシートに書く

インタビューで得た情報をまとめる  
インタビューの仕方の評価をする

<インタビュー>  
(インタビューの一部)

- C 夏の水管理ではどのようなことに工夫をしていますか  
M 暑い中なので、完全に乾かしてしまわないことです。田んぼの様子を見ながら、毎日、水の管理をします。  
C 毎日ですか。それは大変ですね。どれくらいの間隔で水を入れたり、抜いたりするのですか？  
M 3日入れて3日抜くということです。でも、雨のこともあるので、その日の状態を見ます。  
C わかりました。夏はこまめに水の様子を見るということですね。では、田植え前に気をつけることは何ですか。  
M 今度は完全に乾かしてしまうことが大切です。乾いていない田んぼには大きな機械は入れません。ここでもまた水の管理が大切です。  
C どうして大きな機械が入れないのですか。  
M ぬかるんでいると機械が沈んでしまうからです。それに、水分を多く含んでいると、稲をしっかりと刈り取ることができません。  
C わかりました。そのことは知りませんでした。

<インタビュー後の評価>

- ・強引なものの言い方が少し気になった。
- ・会話を続けようとしていたところがよかった。
- ・相手の答に必ず反応を返しているところがよかった。
- ・自分たちのグループもはやくインタビューしてみたい
- ・ていねいな言葉使いがよかった



写真3 室塚さんと電話でインタビュー

- ・農家の人のお米作りの苦勞（田植えや水管理などのそれぞれの作業について）
- ・農家の人のご苦労（減反や、お米の消費量が減っていることについて）
- ・農家の人が一番工夫して取り組んでいることについて
- ・農家の人にとって「ズバリ！！お米作りとは？」

電話を使ってインタビューを行った。教室に電話機を持ち込み、スピーカーをつけて、そのやり取りがほかのみんなに聞こえるようにした。また、テープレコーダーに録音して、後でよくわからなかったところはふり返ることができるようにした。事前に挨拶と打ち合わせをかねて、実際に電話で話してみた。その結果、自分の質問はできるが、相手の話を聞くだけで、なかなか追求することができなかった。事前の打ち合わせの後、それは以下のような原因であることが子ども達の発言から見て取れた。

- ・相手がどのような話し方をする人かわからなかった
- ・途中で話を切ると失礼にあたるのではないかと躊躇した



写真4 評価を考える

・難しい言葉使いがあっても止めないで、考えているうちに話が進んでしまう。

これらの反省をふまえて、インタビューメモをねりなおした。(資料2)

そしてクラスみんなの前でインタビューを行った。(写真3) 前回の反省で、相手の話に流されすぎないようにと気を配るあまり少々強引に割り込む場面が見られたが、自分の考えをしっかりと持ち、聞きたいことを聞くだけでなく、なんとか話をつなげて新しい情報を手に入れようとする姿勢が伺われた。後の子ども同士の評価活動でも、「会話を続けようとするところがよかった」という意見が多かった(写真4)が、情報の引き出し方に対する質問の表現方法の評価が少なく、現段階の子どもにとって、「会話をつなげるコミュニケーションのあり方」に視点が置かれていることがわかった。これからの課題である。(写真5)

実際に専門家の方との交流を、通して子ども達のつぎのような思いが発言や、ふり返りカードから見てとれる。

・友だち同士でのインタビューの時のように、前もって決められた質問項目で聞くのではなくて、自分で質問項目

目が作れることが楽しい。それは今の自分が本当に知りたいことであるから。

・自分のインタビューで相手から引き出した情報が自分の役に立つ

もの、新しいものであることがおもしろい。

・相手とコミュニケーションをとることは緊張するけれど楽しい。(資料4)

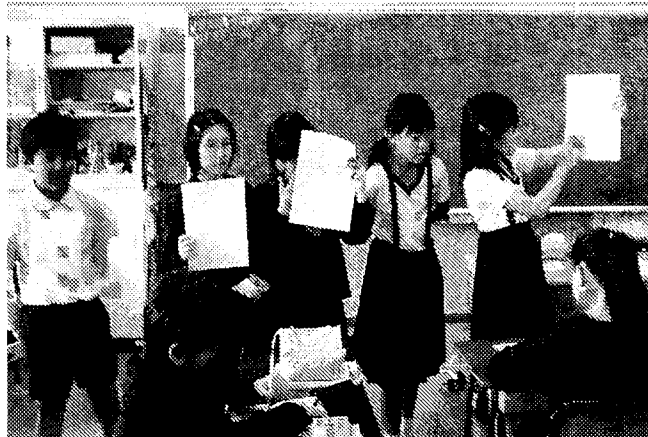


写真5 評価を求める

農家の方にインタビューをし、疑問だったことがわかったことが、もっと深く聞いてみたい、もっと調べてみたいという思いを深めることにつながったと考える。「インタビュー名人になろう」の単元を学習したことは、コミュニケーションを活性化させるための基礎基本としてこれからの学習に生かしていきたいと考える。

資料2 農家の方へのインタビューメモ

<p>どんなことを聞くか(内容) 農家の人の生活様式 質問と答えの予想 の条件果の中で一番つづられる 仕事は何か 手裏と指し手はははは 準備</p> <p>①そのことについてくわしく聞か せよう ②そのことについてくわしく聞か せよう ③そのことについてくわしく聞か せよう</p> <p>④では改めて聞いてみる ⑤では改めて聞いてみる ⑥では改めて聞いてみる</p>	<p>目的 どんな気持ちで米を作っているのかによりど んな気持ちで米を食べたいかを知る</p>	<p>インタビューする相手 農家の人</p>	<p>インタビュー名人になろう</p> <p>① 農家の生活様式 ② 農家の仕事 ③ 農家の道具 ④ 農家の食生活 ⑤ 農家の家族 ⑥ 農家の趣味</p> <p>⑦ 農家の歴史 ⑧ 農家の未来 ⑨ 農家の文化 ⑩ 農家の精神</p>
--	---	----------------------------	--

私たちのインタビューのしかた

- ・インタビューする理由を言っていた。
- ・追求の仕方がよい
- コメントをしっかりと言っていた
- 一つ一つの事に反のうをいれている。あることについてくわしくいっている
- 追求のしかたがよい
- あることについてくわしく、聞いている。最後は、ズバットきかえている。

私たちのインタビューのしかた

- ・しっかりと挨拶をする
- ・答へに合わせて追求する
- ・分からない事質問
- ・たしかかっている
- ・お礼を言っている
- ・お礼を言っている

資料3 農家の方とのインタビューふりかえりカード



## ② 関連する教科をリンクする

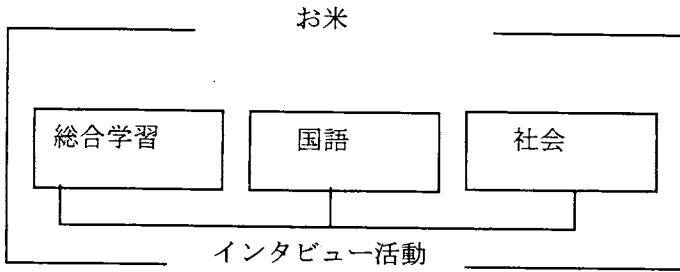


図4 合科的な単元構成

国語科で学んだコミュニケーションを活性化させるための基礎基本を生かすために、関連する教科をリンクして、より実践的なコミュニケーションになるように配慮した。

具体的には、どの教科の「伝える場」にもインタビューの条件を生かす、社会科や総合でインタビューの機会を積極的に設けて、実践的に使う。そのテーマは「お米」である。つまり、お米に関わることという内容が同じであること、インタビューというトピックが同じであることを重点において合科的に扱った。(図4)

### ア インタビューの話し方・聞き方を他教科の話し合い活動に生かす

相手の考えを追求していく方法はどの教科の話し合いでも取り入れた。相手から情報を引き出そうとしている様子をその場で認め、フィードバックし、共有化していった。これまでの「わかりました。」で終わる話し合いは少なくなり、「それはなぜですか。」「〇〇ということですか」と相手の話をさらに引き出そうとする姿勢が多く見られた。また、追求されて答につまらないように、自分の意見をしっかり持とうとするようになってきた。継続して続けていきたい。

### イ 「社会科」「総合学習」でインタビューを実践的に行う

**情報カード**

テーマ(インタビュー)	台本
こんにちは、3年小学校5年1組の山本沙希です。よろしくお話しください。私は、農家の人がかかえている問題とその解決について調べているのですが、このことについてお聞きします。 ① 問題についてお聞きします。米の消費量が減ってきているようなのですが、何が原因でしょうか。(相手が答える) ② 私は、私は農家で働いている人が減っているというのを聞いて、米の消費量が減っているのと同じように他に問題点はないですか。(相手答える) ③ はい、〇〇についてお話しさせていただきます。	

資料4 インタビューの電話メモ

「農家の人にインタビュー」のように、それぞれのグループごとにインタビューを実際に行った。最初は、話が続きなかつたり、引き出しきれなかつたこともあったが、回数を重ねていくうちに、落ち着いて追求する姿が多く見られるようになった。それは、コミュニケーションの基礎・基本として「インタビューの条件」がしっかり理解されていたからである。後の反省会でもその条件に照らし合わせて自分たちの活動を振り返ることができた。

例えば、前述の「農家グループ」である。次に行ったインタビューは「バケツ稲の夏の水管理についてJAに聞く」ことであった。総合学習でバケツ稲栽培をしているのだが、中干しの後、どのような水管理が最適なのか、クラスの誰もわからなかつた。資料で調べても欲しい情報は手に入らない、そんな時、農家グループから「自分たちは農家の人に水管理のことも聞いたから、バケツ稲のことも聞かせてほしい」という申し出があった。そこで、農家グループにインタビューをお願いした。農家グループは質問事項、予想される答え、予想外の反応、礼儀等、前に学習したことをふまえて、自分たちでインタビューメモを作り、(図11 12)実際にインタビューした。その後、自分たちのインタビューをまとめてクラスみんなに説明してくれた。(資料4 5 6)

本当に自分の知りたいことを繰り返し、言葉を変えて追求する姿が見られた。それは、インタビューというトピックを繰り返すことで、その条件にあったコミュニケーションの仕方を体得しつつあることがその理由である。また、「お米」というテーマで社会、総合と学習していることで、子どもの中に「お米」に対する自分の考えをしっかりと持てたことも大きな理由ではないかと考える。

このように学びを深めようとする思いを育むために、関連する教科をリンクさせて合科的に扱うことは効果があると

**電話メモ**

こんにちは、農家の人にインタビューしたいです。今日は、バケツ稲の水管理についてお聞きしたいです。よろしくお願いします。

① 問題についてお聞きします。米の消費量が減ってきているようなのですが、何が原因でしょうか。(相手が答える)

② 私は、私は農家で働いている人が減っているというのを聞いて、米の消費量が減っているのと同じように他に問題点はないですか。(相手答える)

③ はい、〇〇についてお話しさせていただきます。

資料5 電話メモの下書き

